

語り継ぐ人

——体験していないことを、体験した人として語るということ——

授業づくりに役立つ本、授業とからめて生徒に読ませたい本などを紹介するリレー連載。

今回のご担当は、甲斐利恵子先生（港区立赤坂中学校教諭）です。

三年前、戦後七十年という節目の年を迎え、「もう残された時間はない」という思いに駆られていた。戦争体験者が高齢化し、戦争を語れる人がいなくなってしまう。授業の構想も定まらないまま、「語り継ぐ」というキーワードで書籍を検索。頭の中で描いていたのは漠然とした太平洋戦争のことであった。しかし、太平洋戦争と一言で言っても、そこにはヒロシマ・ナガサキ、特攻隊、真珠湾、沖縄など、さまざまな「語り継ぐべき事実」が存在していた。

そして、戦争という枠組みの外にも、フクシマや阪神淡路大震災など、いたるところに「語り継ぐべき事実」があった。

最初に手にした本は『平和は「退屈」ですか 元ひめゆり学徒と若者たちの五〇〇日』です。元ひめゆり学徒と若者たちの五〇〇日であった。「語る人」と「語り継ぐ人」の存在を浮き彫りにした、力のこもったルポであった。この本を読んで、「語り継ぐ人になるにはどうしたらいいのか」という問いがくつきりとした形となった。体験者の話を、まじめに聞いたからといって「語り継ぐ人」は生まれない。語り継ぐとは、「体験者の魂の深みにまですり込み、見たことないもの、新しい価値を発見して、ふたたび上がってくる創造的な」ものだと言われている。

授業はその「魂の深みに降りていく」ことに挑戦した。題材は東日本大震災。あの日のことを新聞記者が語った本『記者は何を見たのか 3・11東日本大震災』の中から自分の語りたいものを選び、その内容にたくさん問いを自分で立てていく。そのときの人々の表情は？ 服装は？ 気温は？ 声のトーンは？ さまざまな問い

に向き合うことで、「語る人」と自分が重なっていく。そして言葉が生まれ、豊かになっていく。「魂の深み」には到底及ばなかったが、発表原稿を書き、語り、話し合う場には、「語る人」にできる限り寄り添おうとする生徒の姿があった。「語り継ぐ」ためには自分の内側から湧き上がってくる言葉が、何より必要だと感じたことだろう。体験や「語る人」の存在に関わらず、「わがこと」として「語り継ぐ」ことは可能だと感じたはずである。



東京都港区立赤坂中学校教諭

甲斐利恵子

福岡県生まれ。光村図書中学校『国語』教科書編集委員。専門は国語科単元学習。著書に、『聞き手話し手を育てる』（共著・東洋館出版社）など。

BOOK GUIDE

記者は何を見たのか
3.11東日本大震災読売新聞社 著
中公文庫/2014年

あの日、取材しようと現地に向かった記者たち。たどり着けない記者、号泣する記者、カメラのシャッターを押せずに葛藤する記者。記者たちの目に映った3.11が胸に迫ってくる記録である。

平和は「退屈」ですか
元ひめゆり学徒と
若者たちの五〇〇日下嶋 哲朗 著
岩波現代文庫/2015年

「戦争体験のない者が、戦争体験のない者を相手に、戦争体験を語る」。この難題に取り組む元ひめゆり学徒と若者たちの日々。「語り継ぐ人」になる壁、喜び。社会人になった若者たちも再び登場する。

ナラティブとかエビデンスとか
看護研究とか、さっぱりわかんない！
というナースのためのナラエビ医療学入門斎藤 清二 著
日本看護協会出版会/2014年

一見、国語教育には無関係に見えるが、ここには「語り」（ナラティブ）を、患者と一緒につくっていかうとする医療者の基本姿勢が語られている。ナラティブとエビデンスの調和は国語教育にも大きな示唆を与えてくれる。



16歳の語り部

雁部 那由多、津田 穂乃果、相澤 朱音 著
佐藤 敏郎 監修
ポプラ社/2016年

東日本大震災から5年の月日が流れ、当時小学校5年生だった子どもは高校生になった。幼い心に映ったあの日の光景。「辛い過去」で終わらせない覚悟とエネルギー。若者が語る言葉の重みを実感できる1冊。

